

● 今月のことば ●

煩惱にまなこさへられて

撰取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて

つねにわが身をてらすなり

〔高僧和讃〕『註釈版聖典』五九五頁

（現代語訳）

煩惱という色眼鏡をかけて物事を見ている
私たちは、阿弥陀如来の救いのおはたらきに
気付くことができませんが、私を救おう
としてくださる広大な慈悲は、怠ることな
くこの私に向けられているのです。



浄土真宗本願寺派
総合研究所研究助手

佐竹真城
さ たけ しんじょう

子どもたちを見ていると、実にいろいろな子があります。かけっこが速い子、お遊戯が上手な子……しかし、なかには「目立たない子だなあ」と特徴をつかみきれない子もいます。詩人の金子みすゞさんは「星とたんぽぽ」という詩を書かれています。そのなかに「見えぬけれどもあるんだよ 見えぬものでもあるんだよ」（新装版『金子みすゞ全集』Ⅱ・一〇八頁）というフレーズが出てきます。昼には見ることでできない星は、夜になればキラキラと輝きを現します。星は常に同じ場所に存在しており、夜を縁として私たちにその姿を知らせてくれます。枯れて春をまつタンポポは、春になると綺麗な花を咲かせます。タンポポは枯れてしまった後も土のなかで根を張って一生懸命に生きており、春を縁として私たちにその姿を知らせてくれます。子どもたちも同じではないでしょうか。

私たちは煩惱という色眼鏡をかけているため、ものごとのありのまま、本当の姿を見ることができません。言い換えれば、子どもたちが内に秘めた本質に気づかず、勝手に「この子はこういう子」と決めつけてしまいがちです。しかし、どの子もみな、置かれた環境や外から受ける刺激によって、とりどりの芽を出す種（可能性）を持っています。あたたかくやさしい眼をもって一人ひとりと真摯に向き合い、その種にさまざまな角度から愛情という水をあげて、大切に育んでゆきたいものです。